

兵庫県宍粟郡と近接地の植物文化財 (3)

建 部 恵 潤

35 宍粟郡一宮町森添御形神社の夜の間杉一付

ヒノキ

(図28)

御形神社は大永7年(1527)造営の本殿が重要文化財に指定されている式内社である。社叢はかなり広いが、自然植生はほとんど破壊され、東辺部や西辺部にシラカシの自然林が残っているに過ぎない。社叢の大部分は室町時代以降に植えたスギ、ヒノキの立派な樹林である。

その中で、本殿背後の夜の間杉が最も巨大である。根張りは現れず、地表の根周は6.90m、目通り5.35m、樹高約40mある。地上約2.50mの高さに第1枝の枯れた基部が残し、それより上には枯枝がない。地上約8mから約15mまでの間に再び枯枝が約10本残っているが、それ以上の上の枝は全部生きている。樹冠は傘状で生長は止まっているが、樹幹には全く損傷がなく樹勢は旺盛であり今後も肥大するものと思われる。

本樹は次のような伝説をもっている。播磨風土記によ
あしはらのしとお
ると、葦原志許乎命(大国主命の別名)が天日槍命と御
めひぼこ

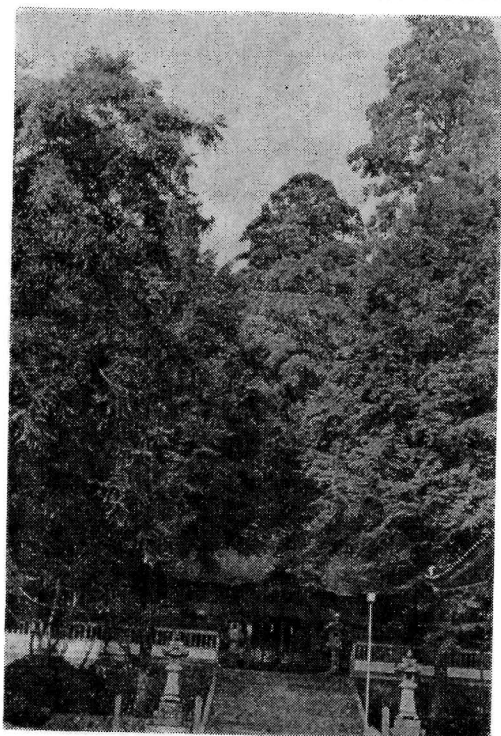


図28 御形神社夜の間杉(中央)

かた
方の里の故黒土志しにだけ尔嵩にいて国土経営をしていたとい
う。2神がここを去ったので社をつくって祀った。とこ
ろが、宝亀年間になって、森添の宮山に一夜の間にな
え状に3本のスギの大木が生え、ここに社殿を営み祀れ
という夢の告があった。そこで3本のスギの中心に社殿
を造営したのが御形神社の起源であると伝えている。こ
うした伝説から夜の間杉と呼ばれているが、とても1200
年の樹令の老木とは思われず、せいぜい400~500年のも
のであろう。他の2株は大正の初め大風で倒れたという
ことである。

この社叢には前述のようにスギの大木が多いが、次に
目通り3m以上のものを表示した。いずれも損傷のない
巨木で、これらも含め社叢全体を保存する必要がある。

番号	目通り (m)	備 考
1	4.75	約2.50m埋まる。地面幹周。
2	4.50	水源地上方。約2.40m埋まる。地面 幹周。
3	4.50	結婚式殿裏。約15m高で2幹。下枝 数本伐採。
4	3.77	社殿東部の林中。
5	3.70	水源下方谷間。
6	3.52	ヒノキ巨木の左方。
7	3.50	夜の間杉の右方。
8	3.00	約2.50m埋まる。地面幹周。

ヒノキはスギに比べて少いが、社殿に向って左上方の
1株が最も大きい。根張りは見られず、根周6.25m、目
通り4.80m、樹高約30mある。地上約5mで3幹に分れ
最大の幹は約15m上でさらに2幹に分れている。ヒノキ
はスギより生長が遅いから案外巨木が見られない。この
巨木は従来宍粟郡付近で見たヒノキでは最も大きいもの
である。ヒノキの巨木は数少いから保存の必要がある。

36 宍粟郡山崎町上ノ上岩上神社の芽生え杉

(図29, 30)

本殿に向って左に、社殿に接して慶長13年(1608)姫
路城築城に当って天主の真柱にしたスギの切株から芽生
えたという伝説のある芽生え杉がある。正面には根張り

が現れていないが、背後には顕著に現れている。恐らく若木のときに倒れて屈曲し、地を這った茎から根を出し



図29 岩上神社芽生え杉（背面）

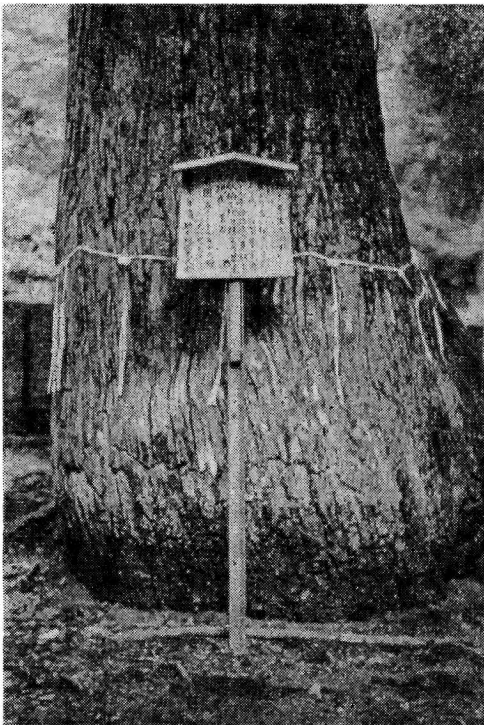


図30 芽生え杉（正面基部）

たものであろう。正面から見ると地際が細く、上で太くなって徳利状を呈していることからもうかがえる。この社叢には天然杉の大木が点在していて、その中には基部が徳利状をしたものがあるが、同じ成因によるものであろう。

正面と背面の地面の高低差は40cmで、背面の高い地面を基準とした目通りは5.56m、樹高約45mある。高さ約6mのところには第1枝の枯れた着根に生じた小枝数本が残っている。その上は約20mまで枝がなく、それから上には旺盛な枝がある。根張りの1部に腐朽が認められるが、幹には損傷がなく樹勢は盛んである。

宍粟郡有数の単幹巨樹で貴重であるが、人が近寄り幹や根張りが傷つく恐れがあるから根元へ立入れないように柵を設ける必要がある。

37 宍粟郡山崎町岩上神社の夫婦杉

(図31)

参道の始点の石段に向かって左に林道に沿った場所にある。山側の地面から約3m、林道側の地面から約5mまで2株が合着したものである。目通りは8.54m、樹高約45mあり、2幹はほぼ同じ太さである。

前項に記したように、この社叢には天然杉の巨木が多いが、高くまで枝が落ちていること、従って枝張りが少ないことが目立っている。この夫婦杉は全樹が見られる位置にあるので特にこの2点がよくわかる。



図31 岩上神社の夫婦杉

近接する下牧谷大倭物代主神社の県指定天然記念物夫婦杉には及ばないが、見事な双幹樹の巨木として貴重であり、樹幹が損傷を受けないよう保護する必要がある。

38 宍粟郡一宮町深河谷池王神社のアカガシ

(図32, 33)

池王神社は標高約400mの山の中腹の平坦部にある。社叢はウラジログガシを主要素とする境内周辺部とアカマツを主体とするその外辺部に分れる。境内北側のウラジログガシ林とアカマツ林との境界付近にアカガシの老木がある。

老木の割りに根張り面積は広くない。樹幹には縦に溝状の凹凸がはげしく、老樹の相状が良く現れている。根



図32 池王神社アカガシ(基幹部)



図33 アカガシ(上部枝分れ)

周8.90m、目通り5.35m、樹高約20mある。地上約4mに東へ伸びる枝が水平状に出ている。約3.50mの高さで2又した幹の北西へ分れたものはさらに2又して枝状に伸びている。他方の幹は直上して、地上約5mで4幹に分れ主幹は不明瞭になる。

枝張りは北西16m、北東18m、南12m、南西11mで傘状をしている。

アカガシは本州(福島県以南)、四国、九州、朝鮮南部、台湾、中国の暖帯に広く分布するカシ類であるが、宍粟郡や近接地域ではアラカシやシラカシに較べて非常に少ない。むしろ稀で珍しいが、この社叢にこのような巨樹があるのは分布上も貴重である。

アカガシの老巨木としては県下でも稀なものであろうから県の天然記念物の候補として有力なものと思う。

39 宍粟郡波賀町小野諏訪神社のスギ

諏訪神社は東面した山腹にあって、山足から急な石段の参道が通じている。社域から上は水のある谷で、本殿背後で社域の両側に分れ、北は小さな溪流、南側は2段になった境内の南側で伏流水となり段で湧き出ている。社叢はこの南北の小さな谷に挟まれた山足から本殿背後に及ぶ区域である。

この社叢はシラカシやヤブツバキがかなり残っていて元来はシラカシを主体とした自然植生であったことがうかがえる。古くこのシラカシ林を伐ってスギを植林したのでスギの大木が社叢を構成している。その中で特に巨大な2株を挙げておく。

最も大きいのは境内の南の谷を越えたところにある。根元の地面の高低差は約1.30mあり、高い地面での目通り4.80m、樹高約40mである。第1枝は約12mの高さにある。上の方の枝に、先端の枯れたものが数本見られ、やや樹勢の衰えが見える。

第2は本殿背後にあるものでやや平坦な場所にあるので地面の高低差は少ない。目通り4.75m、樹高約40mある。この木には枯枝は見られないが樹勢は旺盛とはいえない。

2樹ともに樹幹に損傷がなく、美しい樹膚をもっているが、樹勢に衰えが見えるのは恐らく地中水分の多過によるものと思われる。しかし、早い時期に枯死するというような状態ではない。

40 宍粟郡山崎町下町巖石神社のヒノキとスギ

伊沢川に接した山麓にあって、山腹に露出した巨岩を神体とした巨岩信仰の神社と思われ、この巨岩を中心に現状の約3倍のアラカシ林の社叢があったと考えられる。

巨岩を背負うように建てられた社殿の左右にヒノキと

スギが相対的に植えられている。向って左のヒノキは根周5.25m、目通り4.30m、樹高約30mある。樹高約6mまでは単幹で、ここで2幹に分れている。幹には全く損傷がなく樹勢は盛んである。前記の御形神社のヒノキと共に、宍粟郡では数少ないヒノキの巨木として貴重である。

向って右のスギは根周5.95m、目通り4m、樹高約35mある。第1枝は高さ約6mにあって、この種の巨木としては非常に低い。これはまだ樹勢が旺盛で、さかんに生長しているためであろうと考えられる。

急傾斜の山腹で水はけの良い場所にあるので生育条件がよいため将来性がある。ただ樹幹基部が損傷を受けないように竹すのこで保護するのがよいと思う。

41 宍粟郡千種町鷹巣八幡神社の大スギ

(図34)

八幡神社は千種町立東小学校と道路を隔てて接したところにあり、社域は余り広くなく、自然植生もほとんど残っていないが、シラカシ、ケヤキ、コハウチワカエデオオモミジ、ヤブツバキの大木が残り、シロダモ、コシアブラ、カラスザンショウ、ユズリハなどの大きなものがある。

千種町指定文化財鷹巣八幡神社の大スギは社殿の向って左前方にある。このような境内にあるスギの巨木の多くと同じように、かなり大きくなってから埋められて根



図34 鷹巣八幡神社の大スギ

張りが全く現れていない。根周は5.90m、目通り4.90mで差が少ない。高さは約45mある。約15mの高さに枯枝の根元が3本残り、その上に生きた枝がある。しかし、枝の先端の枯れ落ちたものが多く、枝の着いた部分の樹型は円筒状である。枝張りは南東7.50m、西5.50m、北北西8m、北東5.40mある。樹幹の北側の日光を受けない部分にはアカサルオガセが多数着生している。

生育は止まっているが、樹幹に損傷のない見事な巨樹である。竹すの子で樹幹を保護し保存を図られたいと思う。

なお、参道両側にはスギの大木が多く、目通り2~3mの大木も数株あって、どれも樹幹の美しい傷のないものばかりである。

その中に1株目通り3.60mの見事なモミの大木がある。特に巨大とはいえないが、保護保存が望ましい将来性のある大木である。

その傍らにフジの巨木があり、上記のモミに枝のある部分から上で登っている。残念なことに基部の腐朽が甚しい。千種町の文化財である。

42 龍野市揖西町井関のヤマモモ

(図35)

井関三神社から約300m南の道路に接した場所にある。目通り1.60m、樹高約7mある。雄木である。

このような派立なヤマモモの大木はこの付近では珍し

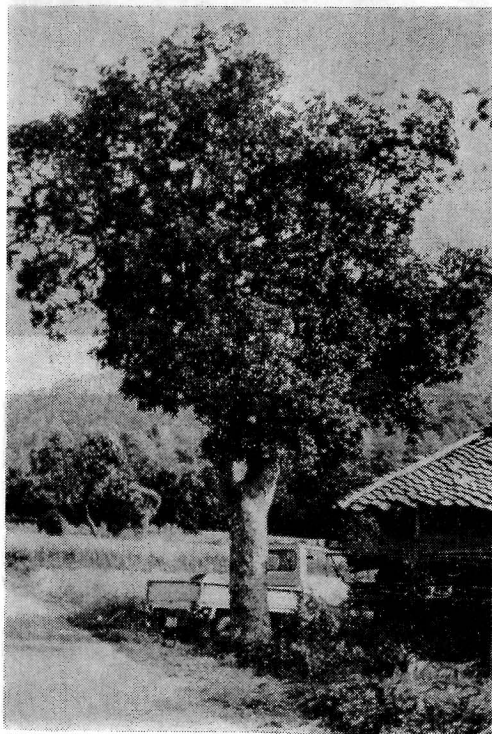


図35 井関のヤマモモ

い。余りに道路に接しているので樹幹が傷つく恐れが多いから、竹の子で巻いて保護し保存されたいものである。

43 宍粟郡安富町塩野大歳神社社叢

この社叢は北面した山麓にあって、下部は谷川に接し余り広くない。高木層はスギ、ケヤキ、アラカシ、ツガ、カヤ、ヤマザクラで構成されている。スギは目通り3.36m、樹高約30mのが最大で、それ以下のものが数株ある。ケヤキは目通り2.35m、ツガは目通り2.85m、カヤは目通り2.10m、アラカシは目通り2.20mのものが最も大きい。これらの高木が混交していて優占順はスギ、アラカシ、ケヤキ、カヤ、ツガ、ヤマザクラの順である。

境内入口付近のカヤ、スギの大木や社叢内部のアラカシやケヤキにフジの巨木がのぼつりついていて花時は美しい。特に林内の1株は根周95cm、目通り82cmの腐朽のない単幹が約7m上まで分枝しないで斜上してアラカシやケヤキに登りついているのは見事である。

亜高木層はイロハモミジ、ヤブツバキ、アラカシから成り、低木層はアオキが優占し、タラヨウ、ヒサカキ、アラカシ、ヤブツバキ、ヒイラギ、ヤブニッケイ、タラノキ、サンショウ、クロモジがある。興味があるのはシイが見られることで、この社叢も元来シイ林であったと考えることができる。また、コヤスノキがある。林田川流域最北の自生地である。

草木層にはカテンソウ、ヒメウズ、ジュウニヒトエ、オドリコソウ、ナガバジャノヒゲ、ユキワリイチゲ、ヤブラン、シャガ、ナキリスゲ、クサイチゴのほか、ピナンカズラ、ゴヨウアケビ、テイカカズラ、イタビカズラ及びアオキ、マンリョウ、ナンテン、タラヨウ、シュロクロモジなどの幼木や芽生えがあり、また、カラタチバナ、コショウノキがあるのが珍しい。

社叢の周りの民有地はスギの植林地であるが、民有地のスギとしては稀な大木である。外観はこれらのスギも社叢の1部のように見えている。安富町自然保護条例によって保護地域に指定されている。

44 宍粟郡千種町下河野八重垣神社社叢

(図36, 37, 38, 39)

千種川の西岸の山麓にある。社叢の上方は小さな谷であるが、本殿のすぐ上で水は境内の地中を潜り、境内の端にある農村歌舞伎舞台のほとりに湧き出すが、再び社叢の地中に入る。谷の水が多いときは社殿の上方で北と南へ分れて、南は社叢の外縁を流れ、北は社叢の中を流れる。このように谷の下方にあるので、社叢の地中水分はかなり多いようである。

この社叢は天然植生が樹めて良く保存されていて、高

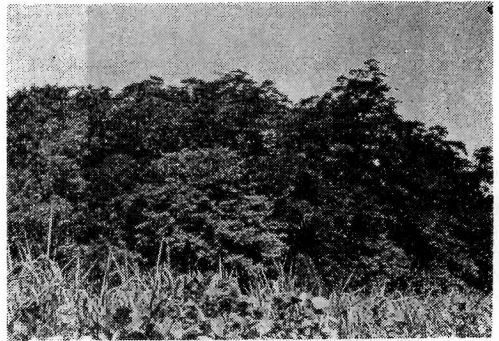


図36 下河野八重垣神社々叢



図37 八重垣神社々叢内部
(左右ケヤキ, 中央カヤ)



図38 八重垣神社々叢
(高木シラカシ, ケヤキ, 亜高木ヤブツバキ)

木層はケヤキ、シラカシ、カヤ、イロハモミジ、ツクバネガシ(1株、目通り2.60m)、ムクノキ、スギから構成されている。優占種はケヤキで、目通り4mを最大に、目通り3m以上の大木が多い。次に多いのはカヤで、目通り2~3mの大木が20株以上林内に点在していて、前報の安富町狭戸大歳神社、山崎町葛根松尾神社より株数が多く、大木も多くある。シラカシも目通り1~1.50m



図39 八重垣神社々叢
(カヤの多い部分)

のものが多数ある。これらの高木の上部にはカラヤンが着生している。スギは目通り3.20mのものが最大であるが非常に少ない。一般に社叢には参道や境内にスギを植え大木になったものが多いが、この社叢のようにスギの少ない社叢は稀である。それだけに天然植生の保存状態が良好だといえる。

社叢内部には幹周90cmの巨大なフジ3が株あって高木層に達しているが、幹がほとんど腐朽している。また、幹周20cmのテイカカズラもある。

亜高木層の優占種はヤブツキで、目通り60~100cmの大木が社叢全体に多く、亜高木層の大部分を占めている。他にヤブニッケイ、アラカシ、ニガキ、キハダなどがわずかにある。アラカシは千種川流域では最も北の自生地である。

低木層は貧弱で、アオキ、ヤブニッケイ、ヤブツバキ、シラカシが多く、その他ナンテン、シロダモ、ケンボナシ、シラキ、クロモジ、コパンノキ、ヤブムラサキ、ムラサキシキブ、ヤマハゼ、コシアブラ、アブラチャン、コンテリギ、ニワトコ、ケヤキなどがあるが、中心部には少なく周辺部に多い。

草本層も中心部は貧弱で、周辺部に発達している。周辺部付近にはテイカカズラ、ツルマサキ、ヤブコウジ、カラタチバナ、ヤブツバキ、ヤブニッケイ、シラカシ、カヤ、ケヤキ、ヤブラン、ホソバジャノヒゲ、ハエドクソウ、ヤブミョウガ、ラショウモンカズラ、ヤネフキササなどの草本類や木本類の芽生え、幼木がある。

社叢の下部は道をへだてて水田となる。南は鳥居から境内までの参道が周辺部にある。これらの周辺部には低木層、草本層が発達し、ノブドウ、カラスウリ、フジ、マタタビ、ヤマガシユウ、サルトリイバラ、テイカカズ

ラ、キズタなどのつる性植物やアオキ、シラキ、ヤブニッケイ、ケヤキ、ケンボナシ、アブラチャン、コンテリギ、ハナイカダ、ナンテン、コゴメウツギ、ネムノキ、ガマズミ、ニワトコ、ナワシログミ、ツルコウゾ、ホオノキなどの木本類、イタドリ、ハナタデ、ノブキ、コミヤマミズ、シュウブソウ、クサイチゴ、ドクダミ、スズムシバナ、アズマガヤ、ヤマホロン、タチツボスミレ、ヒナスミレ、ツルリンドウ、ヒカゲミツバ、サイハイラン、ヤマイタチシダ、ジュウモンジシダ、ヒロハイヌワラビ、イワガネソウ、ミツイシキノデ、ヤマシロギク、クサマオ、イノコヅチ、ウバユリ、ツリフネソウ、ナンバンハコベ、ニシノホンモンジスゲ、イヌワラビ、ヒメワラビなど社叢内部に見られない要素も加わってマント、ソデ群落をつくっている。

上述のように、この社叢は天然植生の保存が極めて良好であるばかりでなく、秋の紅葉の景観が美しく立派で千種町文化財保護条例によって文化財に指定されている。ケヤキの巨木は別件として指定されている。天然植生の保存が優れた極めて貴重な社叢である。

45 宍粟郡波賀町上野宝殿神社社叢

(図40)

西面した山麓にある社叢で、社叢の中央下部に境内がある。

高木層の主体はシラカシで、ケヤキ、オオモミジ、ツガが加わっている。シラカシには目通り2.70mの大木をはじめ、目通り2m以上の大木がかなりある。ケヤキは目通り3.60mを最高に目通り2m以上のものが数株ある。ほぼ中央部に横に点在していて樹高が最も高いので良く目立っている。目通り3.70mのツガの大木がある。

亜高木層の優占種はシラカシで、続いてヤブニッケイが多い。他にオオモミジ、カヤ、サカキが点在し、ヤマザクラ、スギ、ヒノキ、トチノキがわずかに見られる。

低木層でもシラカシ、ヤブニッケイが全域に多く、上方ではユズリハが加わる。このほかに、ゴンズイ、イヌツゲ、サカキ、ヒサカキ、コバノガマズミ、ヤマコウバ



図40 上野宝殿神社々叢

シ、サンショウ、ケヤキ、エノキ、ムラサキシキブ、ナワシログミ、ナンテン、コシアブラ、タラノキ、ニガキ、シキミ、アセビ、ハウノキ、ツリバナ、ミヤマウグイスカグラ、ヤマウルシ、ヤマフジがあるが個体数は少ない。

草本層の主要素はシラカシの芽生えが全域に高密度で見られ、続いてヤブニッケイ、ユズリハ、カラタチバナが多い。その他チジミザサ、ノブキ、ムラサキニガナ、オオモミジ、コマユミ、クロモジ、コマユミ、チャノキ、ヤブコウジ、シュロ、テイカカズラ、キズタ、ピナンカズラ、ミツバアケビ、ナガバジャノヒゲ、ヤブラン、サイハイラン、クマワラビ、シシガシラ、ヤワラシダ、トラノオシダ、コタニワタリ、イワガネソウ、アイアスカイノデ、フユノハナワラビがわずかにある。また、北部にはヤネフキサササがあり、ネササの幼苗が点在している。

山足の周辺部にはヤブツバキ、シロダモ、ミヤマフユイチゴ、ツタウルシ、アキノキリンソウ、ノコンギク、イヌワラビ、ベニシダ、ミズヒキグサ、ヤマノイモ、サルトリイバラなど内部にないか少ない要素がある。

この社叢は上述のようにシラカシが各層の優占種で、天然更新が盛んに行なわれている優れたシラカシ林で貴重である。ところが、林内にはかなりの人が入るようである。自然の道ができ、各所にポリ容器、空かんなどが落ちている。その上にさらに今後人の立入りが多くなると予想される。それは、社叢の下にできた波賀町スポーツセンターで行事があるとき集った人々が立入る可能性がある。森林植生の保護で最も必要なことは人が入らないことである。立入りを防ぐためこの社叢の場合は防護柵を設ける必要がある。

さらに社叢の上方に道があり、運ばれてきたトタン、ポリ製品などの廃品捨場になっているのも感心できない。神域の神聖保持のためにも、植生保護のためにも止めるべきである。なお、上方に竹林があるが拡がらないように留意されたい。

46 宍粟郡山崎町中野桓武伊和神社社叢

(図41, 42, 43, 44, 45)

筆者が初めてこの社叢を調査したのは昭和14年で、桓武天皇がこの地方に狩りに来てここで崩御され、社叢のある小山の山上に葬ったという伝承からこの神社が宣伝されていた頃であった。そうして、この社叢に桓樹という珍しいカシがあるということに深い関心を持った。というのは、前報に記した安富町矢倉神社、山崎町与位神社のイチイガシを知っていたので、桓樹もイチイガシであろうと予想し、突き止めるのが第1目的であった。付近の人に尋ねた結果桓樹はやはりイチイガシであった。

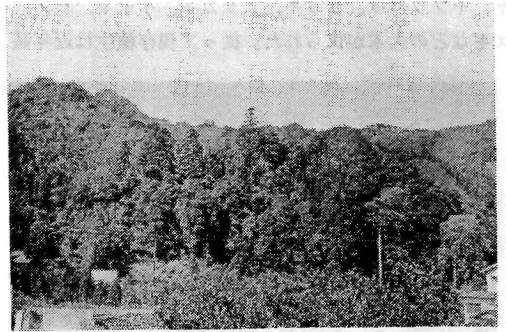


図41 桓武伊和神社々叢 (全景)



図42 桓武伊和神社々叢
(内部、高木ツクバネガシ、
亜高木サカキ、アカシデ)

また、チトセカズラ、ヨウラクランを採った。これらは兵庫県宍粟郡産植物目録Ⅰ(植物趣味)に記録した。その後も3回採集調査をした。

この社叢は山麓に突出した小山にあるが、元は全体が社叢として現存自然植生のようによく繁茂した常緑樹林であったと思われる。それが大部分植林されて、現在自然植生の残っているのは東面する狭い面積に過ぎない。

社叢の下部北端は伊沢川に接し、これから南にある平坦部も近年まで天然植生が残っていたが、伐採してスギやソメイヨシノが植えてある。南端の麓にある社殿背後も伐採されている。その上、北端下部に林道を新設するため今年10月にウラジロガシ、シラカシ、アラカシ、カ

ヤ、ヤブツバキ、サカキ、ヒサカキ、ケヤキ、ヒノ、キスギなどの大木が伐られた。従って現存植生は近年甚しく



図43 桓武伊和神社々叢（内部）



図44 タラヨウの大木とウラジロガシ

く破壊され貧弱になった。

高木層はスギ、ウラジロガシ、ツクバネガシ、アラカシ、イチイガシ、オオモミジ、ケヤキ、アカシデ、タラヨウ、サカキ、シラカシから構成されている。スギは南部の中腹以上に数株ある。最も大きいのは目通り3.40mある。ウラジロガシは大木が多く目通り2m前後のものが点在しているが、すでに先端の枯れたものもあって全般に衰勢期に入っているようである。ツクバネガシにも目通り2m前後の大木がかなりある。ところで亜高木層低木層、草本層にわたってツクバネガシが非常に多いのにウラジロガシはほとんど見られない。恐らく最優占種であったウラジロガシが衰え、代ってツクバネガシ林へ移行しつつあるものと思う。シラカシは下部に、アラカシは南部周辺部にあり、イチイガシは北部の中腹に1株だけある。目通り1.54mある。これは植えたものでなく天然のものであろう。社叢を伐って植林してある北面にはもっとあったと思う。

林中には目通り約2.50mの倒木や太い枝の枯れて落ちたものが多くあるが、これらにはムギラン、フウラン、ヨウラクランが着いたものがあつたから、カシ類の大木の樹上には着生しているのは確かである。また、カシ類その他の大木の樹幹にはマメヅタの着生が顕著である。

タラヨウも1株だけ最下部にあるが、元はこれより下も社叢で高木に被われていたのを伐採したので樹幹が露出したものである。(図44)高さ1.60mで2幹に分れている。分岐点で北側のものの幹周1.55m、南側のはやや細く1.35mである。

亜高木層の構成要素はサカキ、ヤブツバキ、アラカシ、シラカシ、ツクバネガシ、モチノキ、アセビ、カナメモチ、ネズミモチ、モミ、ツガ、ネジキ、アセビ、ウリカエデ、ヒサカキである。この中注目をひくのはネジキ、アセビの大木が主として頂上部から南への尾根付近に多いことである。ネジキには目通り70cm~1.20mのもの、アセビには目通り90cmのものが多数ある。モチノキも尾根添いにあって、太いものは目通り1.22mある。モチノキは穴栗郡ではここだけであつて珍しい。

稀なコバノミツバツツジの巨木も特記の価値がある。

(図45)目通り25cmある。急斜面に斜上し、根元から4本のひこばえが出ていてこれで判別できる。貴重な巨木である。低木層にはアラカシ、ツクバネガシ、シラカシ、サカキ、ヤブツバキ、モチノキ、タラヨウ、カナメモチ、シキミ、ヒイラギ、アセビ、アオキ、オオモミジ、コハウチワカエデ、ウリカエデ、コシアブラ、アカシデ、ネジキ、ヤブムラサキ、クロモジ、ヤマウルシ、ミヤマガマズミ、ケヤキ、コバノミツバツツジ、シロバナウンゼンツツジ、コンテリギ、ツガ、モミなどがあ



図45 コバノミツバツツジの大木

草本層は麓と上方ではややちがっている。麓ではスズムシソウ、イヌシヨウマ、サンシヨウソウ、ムカゴイラクサ、チゴユリ、ツルアリドウシ、ヒメウズ、ミヤマフユイチゴ、マンリョウ、カラタチバナ、ジダケ、ベニシダ、マルバベニシダ、オオバノイノモトソウ、ハカタシダ、フモトシダ、キジノオシダ、サイゴクイノデ、イワトラノオ、カタビバ、アオホラゴケなど、上方へ行くに従って少くなるものや全く見えないものがある。チトセカズラも2カ所にある。ただ、伐採した平坦部にあったイズセンリョウは終に見られなかった。

社叢裏から自然植生と植林地の境界付近を通り頂上へ道がある。この道に添って見られる草本層の要素にはチジミササ、ササクサ、ツルリンドウ、イノコズチ、ヨメナ、イタドリ、イチヤクソウ、チゴユリ、ヤブラン、シュンラン、ヤマノイモ、ニシノホンモンジスゲ、テイカカズラ、ビナンカズラ、クバヤマボクチ、ヤブムラサキ、ナツツタ、ヤマコウバシ、アラカシ、シラカシ、アオキ、ヤブコウジ、ケヤキ、サルトリイバラ、ネズミモチ、ソヨゴ、アセビ、コシアブラ、カナメモチ、ヒサカキ、ネササなどがある。特に多いのはツクバネガシの幼苗である。

内部の草本層は貧弱な場所と豊富な部分とがある。高木層の繁茂している下は貧弱であるが、日光を受け易い場所ではよく発達している。このような場所はやはりリッ

クバネガシが多く、また、倒木で荒れた場所にはコシアブラ、ヤマウルシ、カラスザンショウ、イモノキなどが見られる。

この性植物は大壮なものがなく、テイカカズラ、イタビカズラ、ナツツタがのぼりついたものが若干見られるに過ぎない。

この社叢は上述のように、この地方に分布するカシ類が全部自生する珍しい社叢で貴重である。また、チトセカズラの自生地としても重要であり、コバノミツバツツジの巨木、イチイガシ、モチノキ、ネジキやアセビの大木も保護保存を要する。これ以上の伐採をしないよう特に希望したい。

47 宍粟郡波賀町道谷阿於意神社社叢

(図46, 47)

道路に接した山の凸出部にある。最下部に神社がありそれから上方と北面に社叢があって、最も上に小祠がある。本社から社叢を登って社叢の背後に出て登っていくと小祠に着く。それから北面の社叢の中を下る道がある。植生のよく保存されているのはこの北面である。

高木層はコナラ、トチノキ、クリ、オオモミジ、カスミザクラ、ケヤキ、エンコウカエデ、スギから成り、多いのはコナラ、トチノキ、クリである。これらの大木の上方にはミヤマノキシノブ、オシヤグジデンドウが着生していることが倒木から判明する。

亜高木層にはこのほかクマノミズキ、ウワミズザクラ、コバノトネリコ、アワブキ、ダンコウバイがある。これらの樹幹にはイワガラミ、ツタウルシが登ったものもある。

低木層はコシアラブ、ウコギ、ミヤマガマズミ、オオモミジ、オトコヨウゾメ、ウグイスカグラ、クマノミズキ、ツノハシバミ、トチノキ、ケヤキ、ウツギ、ナワシログミ、ミヤマガマズミ、イヌガヤ、クロモジ、カマツカ、アワブキが見られる。

草本層はコンテリギ、イボタノキ、ツルマサキ、サンシヨウ、オヘビイチゴ、ミツバアケビ、モミジイチゴ、

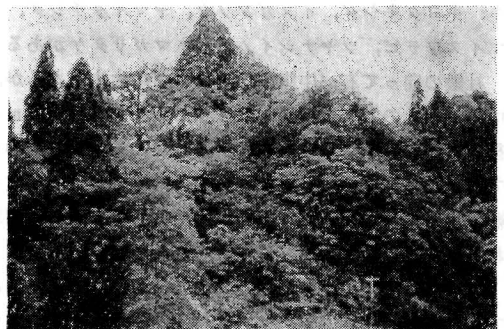


図46 道谷阿於意神社々叢

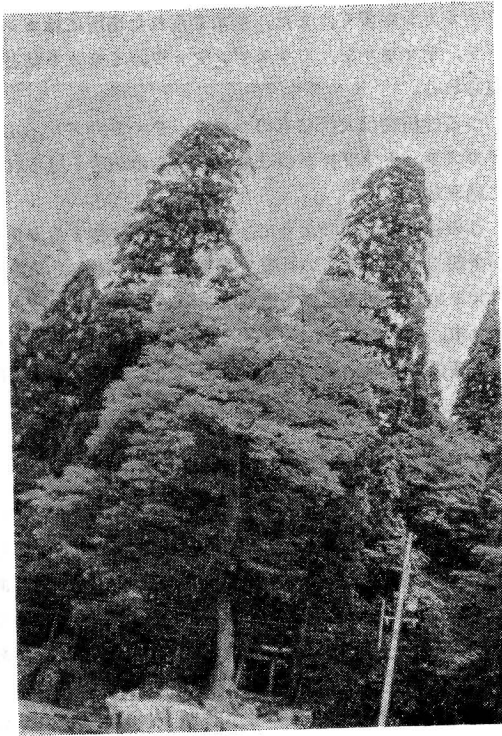


図47 阿於意神社々叢 (左スギの大木)

サルトリイバラ, ハナイカダ, コナラ, クリ, トチノキ, ハンショウズル, ツルリンドウ, チゴユリ, キクバヤマボクチ, ヤマヅノホトトギス, シシガシラなどがある。頂上小祠付近にはカマツカ, ヤマツツジ, ツリバナ, イヌザンショウ, ノブドウ, リョウブ, ヤブコウジなど, 小祠から本社への道に添ってノブドウ, リョウブ, クマヤナギ, カナクギノキ, ヤマブキ, ムラサキシキブ, ミツバカエデ, オトコヨウゾメ, クマノミズキなどが低木として出てくる。シオデ, キクバドコロ, アキノキリンソウ, ジュウニヒトエ, ウツボグサ, ツルコウゾ, ヒメキンミズヒキは林中では見られないか少い草本層の要素である。

社殿裏はスギが多く, その下にはアオキ, ツルマサキ, キヨタキシダ, イヌガンソク, ヤマイタチシダ, ヤマイヌワラビ, ツヤナシイノデ, ネマガリダケがある。

社殿の向って右, 中腹, 頂上にスギの大木があるが, 中腹, 頂上のは相接した2株でいずれも幹周2m前後である。社殿傍らのものは目通り3.70m, 高さ約30mで, 樹幹に損傷のない大木である。根張りが地面に広く網目状に現れているが, 土を入れて被わないと表皮が剥れて腐朽し, 生育に影響し樹令を保ちがたいであろう。

この社叢は中国山地の標高約650mのところにあるのでアラカシ, シラカシ, ヤブツバキ, サカキなどを主要素とする暖帯常緑樹林の社叢とは全く異っている。わず

かにヤブコウジが暖帯要素として注目される。構成要素には温帯要素がかなりある。温帯の植生を保存する社叢として珍しく貴重である。社叢の中央部に伐採されて樹令の若い部分がある。この回復を図り, 現存自然植生の保護保存を図ることが望ましい。

48 揖保郡揖保川町袋尻加茂神社社叢

(図48, 49, 50)

袋尻の南にある標高100mの伝城山国有林から北へ凸出した先端にあって, 西, 北, 東は水田に囲まれている。国有林と社叢とは植生が全くちがって明瞭に区別できる。

神社は東面した中腹にあるが, 参道周辺や境内にはスギ, 境内の北や国有林との境界の下方にヒノキの植林がされている。従って自然植生が良く保存されているのは北側の急斜面, 社殿裏の背稜部から西側一帯, 東南部である。

一般的に見て, 草本層の発達した区域(A)と草本層の貧弱な区域(B)に区別することができる。

A1区の高木層はヒノキ(植林), 亜高木層はカクレミノ, アベマキ, クリ, ヤマザクラ, モッコクで, カクレミノが優先する。低木層はヤブツバキ, アラカシ, サカキ, ヤブニッケイ, シヤンチャンボがあり, 草木層はツル

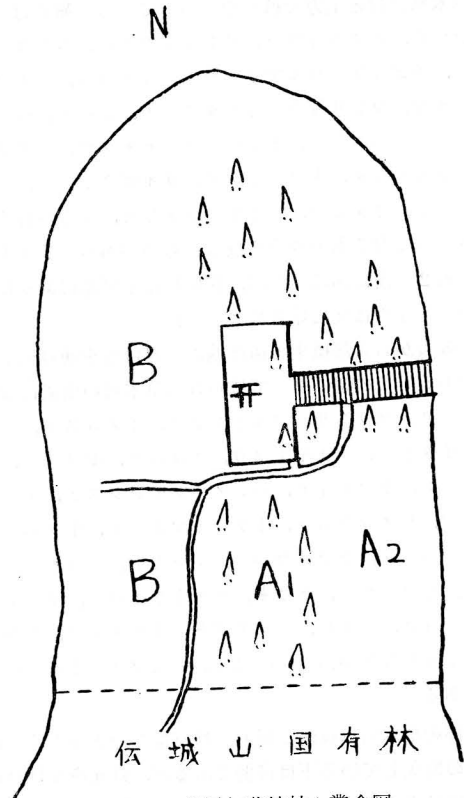


図48 袋尻加茂神社々叢念図



図49 袋尻加茂神社々叢（西北から見る）



図50 ヒメカンアオイ

アリドウシ、ヤブラン、ナガバジャノヒゲ、イヌツゲ、サカキ、ヤブニッケイ、アラカシ、ヤブツバキ、ヒサカキ、マンリョウ、ヤブコウジ、イヌマキ、カクレミノ、ヤマウルシ、ナツツタ、テイカカズラ、モチツツジ、ベニシダ、トラノオシダ、イヌシダ、ウラジロ、トウゲシバ、ヒトツバがあり、道路添いにはハリガネワラビ、イワヒメワラビ、ワラビ、ヒヨドリバナ、クズ、クスノキが加わる。ヒノキの疎林に元の植生要素が入って回復しつつある状態と考えることができる。

A 2区の高木層、亜高木層はカクレミノが優占し、アベマキ、ヤブツバキ、アラカシが加わる。低木層は貧弱であり、草本層はミヤマフユイチゴ、チゴユリ、ヤブラン、ツルアリドウシ、ミヤマウズラ、ナガバジャノヒゲ、マンリョウ、ヤブコウジ、イヌマキ、カクレミノ、ヤブツバキ、シャシャンポ、ソヨゴ、アオキ、ヒサカキ、アラカシ、アカメガシワ、モチツツジ、コバノガマズミ、サルトリイバラ、テイカカズラ、ビナンカズラ、イタビカズラ、コウヤボウキがある。高木層の樹令が若いから一度伐採されたと思われる。

B区は背稜部及び北、西の斜面で、自然植生が最もよく保存され、背稜部では低木層、草本層が極めて貧弱である。

高木層はアベマキ、カクレミノ、ナナメノキ、ソヨゴ、モチノキ、アオハダ、アズキナシ、ウラジロノキ、シャ

シャンポ、ヤブツバキ、ネジキ、クリで構成されている。特にアベマキの大木が多いのが目立ち、最大のものは主幹の上部が枯れているが目通り2.80mあり、そのほか目通り1.50~2mのものが多い。カクレミノは目通り1.34m、アオハダは目通り1.37m、シャシャンポは目通り95m、ソヨゴは目通り1.10m、ナナメノキは目通り1.17m、ネジキは目通り97cm、アズキナシは目通り1.20m、ウラジロノキは目通り1.07m、ヤブツバキは1.20mの大木がある。また、目通り95cmのフジ、目通り27cmのテイカカズラ、目通り18cmのクズなど巨大なつる植物がわずかであるが見られる。アズキナシやウラジロノキの大木は稀で珍しい。

亜高木層はアラカシ、カクレミノ、ヤブツバキ、ナナメノキ、シャシャンポ、モチノキ、クリ、ヤマザクラ、ソヨゴ、イヌビワがあり、低木層にはアラカシ、カクレミノ、ヤブツバキ、モッコク、ソヨゴ、イヌビワ、アオキがある。

草本層はヤブラン、マンリョウ、センリョウ、ベニシダ、ヤブコウジ、カクレミノ、ヤブツバキ、テイカカズラ、ソヨゴ、ツルアリドウシなどがわずかに見られるに過ぎない。

社叢の下部を外から見ると、クサギ、エノキ、ヤブツバキ、アラカシ、ヒサカキ、コバノガマズミ、カマツカ、ヤマハゼ、イタドリ、ヨモギ、ミゾシタ、ゼンマイ、イノモトソウ、ウラジロやつる性のノブドウ、ナツフジ、ビナンカズラ、テイカカズラ、クズ、カニクサなどがソデ群落をつくっている。

また、社叢の1部にヒメカンアオイが自生している。新産地である。

この社叢は暖帯の海岸に近い場所に発達した植生の一型として保存が極めて良好で、播磨西南部の海岸に近い地方の代表的な社叢として貴重である。保護保存を強く要望してやまない。

〔付記〕

今回の調査には室井紳、岩谷成彦、杉田隆三、内海功一、家永善文、橋本光政、佐野駿介諸氏が行を共にして御援助くださったものが含まれている。また、志水出世、中藤昌成、横尾政男3氏は自動車の便を提供くださった。深く感謝いたします。

(48. 10. 31)